



平成25年10月22日
内閣府（防災担当）

南海トラフの巨大地震モデル検討会（第41回）及び 首都直下地震モデル検討会（第23回）合同会議 議事概要について

1. 検討会の概要

日時：平成25年8月1日（木） 13:00～15:00

場所：中央合同庁舎第3号館 防災A会議室

出席者：入倉委員、佐竹委員、福和委員、山岡委員、山崎委員の南海トラフの巨大地震モデル検討会各委員

佐竹委員、武村委員、平田委員、福和委員、山崎委員の首都直下地震モデル検討会各委員

2. 議事概要

最大クラスの強震断層モデルの長周期地震動の計算手法などについて事務局から説明を聴取し、委員間で議論を行った。今回の議事の概要は次のとおり。

【首都直下地震】

○断層が不明瞭な地震の規模としてM6.7より小さいものは、その可能性が高く、それ以上では認められる可能性がだんだん小さくなる。基本は6.7としてそれ以上のものは参考資料として示すのはどうか。

○今回の首都直下の検討では断層の上端深さを地震発生層+2kmか5kmの深い方としているが、この扱いは地域によって変えればいい

【首都直下M7プレート境界地震】

○フィリピン海プレート内の地層で、南北と東西の断層で、南北に置いたほうが西まで震度6弱が広がるのは、ディレクティビティが関係しているということか。

【首都直下地震のM8から最大クラスの地震】

○埼玉付近の特異な増幅については工学的基盤より上の層厚が厚いために、AVS30によって増幅が再現できないのではないかと。ほかのところと違って、堆積物が非常に厚い等の別の理由があるからこういう方法を取るという説明があればよいのではないかと。

○埼玉付近のボーリングデータとの違いをしてみることにしたい。

- 単に表層部での震度増分が大きいだけではなくて、地盤の周期特性が当時の建物の壊れやすい周期に近いことで全壊率が上がっているのかもしれない。
- 液状化の可能性はないか。
- 液状化すると全壊が少なくなるため、被害は減るはずだ。
- 東京湾内の地殻変動による最大クラスの津波を計算するときに浅い30km位の層のみで滑るというモデルは非常に不自然ではないか。

【長周期地震動】

- 長周期動のスペクトルを見ると短周期3秒から6秒の部分でパワーが足りない原因は、強震動生成域だけで計算しているからではないか。背景領域を入れて計算してみるかどうか。

<本件問い合わせ先>

内閣府政策統括官（防災担当）付

調査・企画担当参事官 藤山 秀章

同企画官 中込 淳

同参事官補佐 平 祐太郎

TEL : 03-3501-5693（直通） FAX : 03-3501-5199